

体験学習で学校を変える

京都大学教育学部同窓会における講演より

学校法人きのくに子どもの村学園

堀 真 一 郎

私は大学院のドクターコースの1年が終わったところで、大阪市立大学の方に来ないかというお話をいただき、そこで25年間勤めました。けれども、どうしても自分自身の思うような学校をつくりたいと思って、ちょうど50歳の時に大学を辞め、今もなお子どもたちと楽しく毎日を過ごしております。子どもたちからは「永遠の38歳」と呼ばれています(笑)。

今日は時間も限られていますので、大急ぎで子どもたちの様子を、そして私たちがなぜこういう学校を作ろうと思ったのかについて、画像で見えていただきながら話を進めさせていただきます。

私の郷里は福井県の勝山という雪の深いところです。その中のある分校に私の母親が3年間勤めました。その学校の雰囲気、子どもと大人との関係、あるいは村の人と学校との関係、そういったことが、私にとっては原点のようなところになりました。福井県勝山市立の北谷小学校の杉山分校という

ところでは。

ちょうどその頃、まだ小学校の5年生ぐらいでしたけれど、あの『二十四の瞳』の、最初の白黒の映画を見に行ったことがあります。これも、自分にとっていちばん大事な出発点かなと思います。

さて、京都大学の教育学部で、この先生との出会いがすべてを決めたと言ってもいいと思います。

あじさかつぎお

鱒坂二夫先生です。鱒坂先生は、



鱒坂二夫先生

A. S. ニール

教養課程の1年生のために専門講

義としての「教育学」という講義をなさっていて、その時に伺った話がとても私の心に響き、専門課程に入ったら鱒坂先生のご指導を仰ごうと決めておりました。その頃の私は、先ほども言いました山の分校のことが頭から離れませんでしたから、卒業論文は「僻地^{へきち}教育」で書こうと、固く心に決めていました。

ところが3年生の秋になり、イギリスのサマーヒルという学校を作ったニールの本を読んでしまったばかりに、僻地教育で卒論を書くことから心変わりして、鱒坂先生に「ニールで卒論を書いてもいいですか」とおたずねしました。鱒坂先生はすごく喜ばれて、「それはいい。ぜひともやりたまえ。何か資料があつて、手に入りにくかったら研究費で買うぞ」とまでおっしゃいました。その鱒坂先生からいただいた最も

大事な教え、それは「**教育学的現実**」ということです。教育の研究をする者は「子どもがそこにいるという現実」から出発しなければならない。ことばを換えて言えば、子ども不在の教育学をするなよ、ということでした。

1992年4月に私たちの学校がようやくできました。8年かかりましたが、現在は全国5か所に小学校と中学校、そして和歌山には高等専修学校という高校もあります。いちばん最初が和歌山（橋本市）のきのくに、2番目が私の郷里でもある福井県のかつやま子どもの村、3番目が北九州、次が山梨県の南アルプス市、最後に、これはできてからまだ4年目ですけれども、長崎県の^{ひがしそのぎ}東彼杵という町の子どもの村です。私は月曜日から金曜日まで、この5か所を順番に回っております。瀬戸内海はフェリーを使いますが、あとはすべて自家用で回っています。皆さん、次に車を買われる時は三菱のパジェロがいいですよ（笑）。あれは本当によく走ってくれますし、揺れませんので。

そしてもう一つ、イギリスのスコットランドで、寄宿学校だったキルクハニティ校を買い取り、私たちの学校の子どもたちを毎年のように連れて行っています。今現在(23年7月)も高校生が滞在しています。毎年のように小学生も行くのですが、コロナの間は控えています。コロナの間は控えています。9月



きのくに子どもの村



上空から見たきのくに子どもの村

と10月には中学生も連れていきます。いちばん最初のきのくに子どもの村は、すべて木造です。上から見ると写真のようになっています。黄色の長方形の部分が20周年ホールで、開校20周年に建てたのですが、この写真にはまだ映っていません。かなり山の中です。

かつては橋本市の公立小学校の分校があったのですが、私たちの学校として使わせてもらう話が暗礁に乗り上げ、結局、自分で土地を求めて、小学校、中学校も、高校の順で作りました。寮が数棟で、周辺に点々とあるのが昔の村の家です。

福井県のかつやま子どもの村は、公立の小学校の子がい



かつやま子どもの村



南アルプス子どもの村

なくなったので、何とかして有効に活用したいという市長さんや議員さん、教育長さんたちの熱意に応える形で、1998年に2つめの子どもの村小学校として誕生しました。

北九州子どもの村も、平尾台という山の上の分校だったのですが、子どもがいなくなることに目をつけた人たちが学校を始めました。私も、学校ができるまでは手出しも口出しもしましたが、なかなか子どもが集まらない。開校したときに11人、3年後には9人に減ってしまい、私たちにSOSが来て、何はともあれ急いで中学校を作ることにしました。現在は、小中あわせて子どもが120人近くになっています。

南アルプス子どもの村は、もとは果樹園だったのですが、高齢化でしんどくなってきた人たちが土地を譲ってくれました。ちょっと戻りますが、かつやま子どもの村は元は公立の小学校だったわけです。しかし私たちは、家賃も使用料も一切払っていません。借り物の施設で私立の学校ができたという最初のケースです。文部科学省の方からも、今まではこ



北九州子どもの村



ながさき東そのぎ子どもの村

んな例はなかったから、今後はそういう話も出てくるかもしれないので、いろいろ教えてほしいとまで言われました。

北九州子どもの村も、市からタダで借りて使っている土地と建物に、私たちが中学校を併設しました。しかし、南アルプス子どもの村は、土地も建物も自前で用意しました。ほんらい私立学校というのは、自前の施設でないとダメ、というのが文科省の鉄の掟だったのですが、その壁を我々が破ったことになります。

ながさき東そのぎ子どもの村では、町長さんと教育長さん、議員さん、それに土地の人たちの熱意に負けてとうとうできてしまいました。

日本じゅうのあちこちから「もう一つ子どもの村を」という話が届いています。北は北海道から南は沖縄まで、これまでに21の自治体からお招きがありました。

最後はキルクハニティ子どもの村です。例のサマーヒルをつくったニイルの影響を受けて、この学校を始めたのがジョン・エッケンヘッドという人です。57年間続いた後に廃校になったので、私たちが買い取って、子どもの村の子どもたちを連れて行っているわけです。短ければ3週間、長ければ2カ月の予定で滞在します。映っている小さい子らは、まだ小学生です。

ある小学1年生の子が、引率の副学園長に対してこんなことを言い出しました。



キルクハニティ子どもの村と
ジョン・エッケンヘッド

「マルちゃん、この国はちょっとおかしい。変や。」
あんまり言うものですから「どこが変なの？」って聞いたら、彼が言いました。

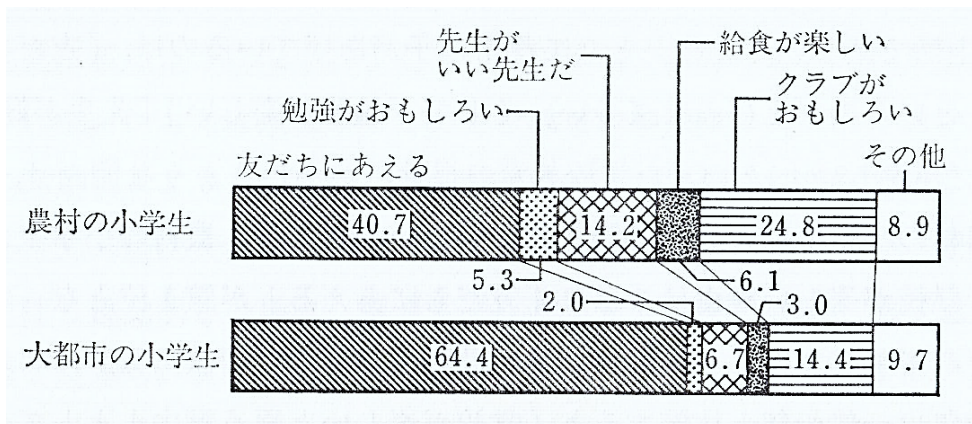
「だって、言うてることがさっぱりわからん」。

私はこの感覚に感動しましたね。

私たちの学校は、どれも小さな学校です。学校を大きくしてはいけないというのが私の持論です。全部で11校ありますが、子どもの数は全部で710人。子ども全員の顔も名前も、さらにお父さんお母さんのことも、どの職員もが知っていることが可能になるには、これできりぎりの人数だと思います。

子どもたちの学習の質を変える

大阪市立大学に勤めながら、学校づくりを始めたいと思っていた時に、最後の一押しをしたのが次の図です。1980年代



の中ごろに小学生たちの生活実態調査をしました。たくさんの質問の中に「あなたは学校でいちばん楽しいのは何ですか。一つだけ選んでください」というのがありました、その質問の集計をしたところ、ショッキングな結果が出ました。

「農村」というのは福井県の勝山市で「大都市」は大阪市です。最も楽しいのは「友だちに会える」というのがどちらもこんなに多い。そして何よりも私がショックを受けたのが、「勉強がおもしろい」を選んだ子が農村でたった5%。大阪に至っては2%なのです。

いくらなんでも、これはひどいではありませんか。学校というのは、どう考えたって学習をするための施設です。でも、その学習がいちばん楽しい、楽しみだ、早く明日になってほしい、とまって待っている子は、大阪では100人のうち2人しかいません。1クラス30~40人の中に1人いるかいないかわからないという惨憺たる結果です。

この結果の数字は、調査をお願いした学校の現場の先生方

にお見せすることはできませんでした。私たちは、せめて子どもたちの3分の1くらいが「授業がいちばん楽しい」と言ってくれるような学校をつくろうじゃないか。それも、自分たち子どもたちのために、と話し合っ学校づくりが始まりました。

私たちは、はっきり決めました。授業および学習、あるいは勉強の質を変えない限り、学校で勉強がいちばん楽しいという子の数はふえそうにない。

「知識や技術や価値観を先生が子どもに伝える」という仕組みを変えるしかない。子どもたち自身が発見する、子どもたち自身がやってみる、という学習に変えないことには、勉強が何より楽しいという子はふえない。先生が子どもに、知識や技術や価値観を教え込む「授業」つまり「業を授ける」という意味の授業はやめよう。

南アルプス子どもの村で、ある日の見学会の時にこんなことがありました。見学客の一人がすごく遠慮がちに「子どもたちがすごく楽しそうで、生き生きしているのに感動しました」と言われたあと、ことばをちょっと区切って、「でも、学力は大丈夫なんでしょうか」と恐る恐る質問されたのです。ちょうどその時、進学先の高校が振り替え休日か何かで、たまたま遊びに来ていた中学校の卒業生が目に入ったので呼び止めました。

「りこちゃん、りこちゃん。高校の授業で困ってない？」

即座に答えが来ました。

「堀さーん。高校の方が、うーんとラクだよ。」

「どうして？」と聞いたらこう言いました。

「高校ではね、先生の話聞いていたら、それだけで済むもん。」

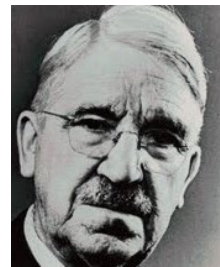
現代の日本の学校教育に対する、これ以上に痛烈な批判はないと思います。彼女、さらに続けました。

「ここの中学生の時には、メチャクチャ忙しかった」。

したいこと、やりたいこと、できることがありすぎて困っていたのでしょ。子どもたちが「あれもやりたい、これもしたい！ ああ困った、時間がない！」と悲鳴をあげるような学校であり続けたいと私たちは思っています。

デューイと Learning by Doing

さて、学習の質を変えるためにまず注目したのが、ご存知アメリカのジョン・デューイです。彼は、主著といわれる『民主主義と教育』の中でははっきりと書いています。



「教育の使命は、過去の価値の伝達にあるのではない。

未来の価値の創造にあるのだ。」

次のことばもよく知られています。

「1オンスの経験は1トンの理論に勝る。」

つまり自分でやってみることは、たとえそれが少しでも、先生からどっさり教わるよりもずっとよろしい、ということです。自分でやってみるとは、自分で考えて何かに挑戦するということです。子どもであれ、前線の科学者であれ、自分で考える時には大事な5つの局面があります。子どもたち自身が、問題が生じた、困った、何とかしたい、というような状況を感じ取るのですが、普通の学校ではそうはなっていません。

先生が入室すると「起立・礼」から始まり、「国語の教科書の73ページを開いてください」と、いうようにして学習が始まります。子ども自身が、知りたい、考えたい、ということではないのです。デューイが言うには、子どもたち自身が問題を感じ取って、「一体どうなってるんだろ」、「ああ、これがいかん」、「これを何とかせんと」ということで仮説を立てます。その仮説をもう一度よく整理して、「これでいけるはず」と結論をまとめ、それが妥当な結論かどうかを子どもたち自身が実行して確かめます。

普通の学校では、子どもが「これは大変だ」とか、「何とかせんと」とか感じて頭をはたらかせる、というようなことは起きていな

創造的な思考の5局面（デューイ）

- | | |
|------------|------------------------------|
| 1. 問題の感知 | Sense of a Problem |
| 2. 問題の観察 | Observation of the Problem |
| 3. 仮説の暗示 | Suggestion of the Hypotheses |
| 4. 結論の推敲 | Elaboration of a Conclusion |
| 5. 行動による検証 | Active Testing |

いのではないのでしょうか。あったとしても非常に少ない。それから結論が正しいかどうかを、自分で確かめるのではなくて、先生が○×をつけてしまいます。私の学校に途中でやってくる子の中に、こんなことを言う子がいますよ。私たちの手作りのプリントを「これはどういうふうに考えたの？」とかいったやり取りをしながら見せてもらうのですが、何人かの子から言われることがあります。

「どう考えたかはいいから。○か×かを先に言って」

こういう子が少なくないのです。これでは子どもたちは、先生が○をつけたから正しい、×をつけたら間違っている、と考えるようになってしまいます。

私たちの学校について、オオタヴィンという人が『夢みる小学校』という映画をつくりました。あちこちで自主上映会という形で観てもらっているようです。私たちが頼んだのではなくて、監督自身が面白がって作られたのですけれど、その映画の中で明治学院大学の辻信一という教授が、こういう発言をしておられます。

「現代の若者には、『問い』を発する力が足りない。子どもの村の卒業生にはそれがある。」

つまり子どもたち自身が学校や普段の生活で、「あれ、これ何？」とか、「なんで？」とか、「なんとかせんと」とかいう思いにとらわれることが非常に少ない。明治学院大学で

は、子どもの村の卒業生にそれが目立つ、と言っておられるのです。じっさい私たちの学校の卒業生が、この大学の卒業生の代表に選ばれたり、卒論が特に良かったというので学長から特別表彰を受けたりしています。



さて、私は鯨坂先生から言われたことばを忘れられませんでした。子ども自身に接して、子どもを見ながら、子どもと共に教育学をつくっていく

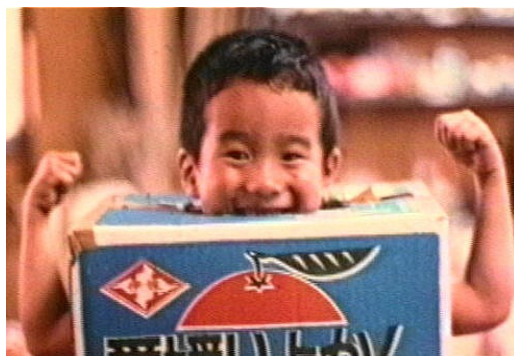
ように、というあの教えです。それで大阪市立大学に勤めていた時に、近くの幼稚園の協力を得て幼児教室という形で、おもちゃを作る、料理をする、絵本を作るという実践をやってみました。写真は3～5歳児の子どもたちが「かんげた」、あるいは「かんうま」を作っているところです。「ポックリ」というところもあるようです。後ろの人たちは学生さんです。

このおもちゃ作りには大事な原則が2つありました。

1. 作り方を教えない。作っている間に自分で考えないといけないような困ったことが起きる。
2. 教材を教材屋さんから買うのではなくて、身の回りにあるものを使ったおもちゃにする。身近な材料や不用品を



幼児教室のおもちゃづくり

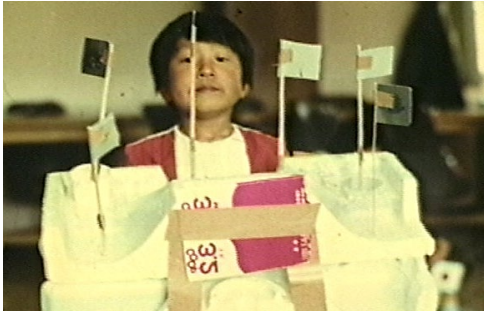


おうち と ロボット

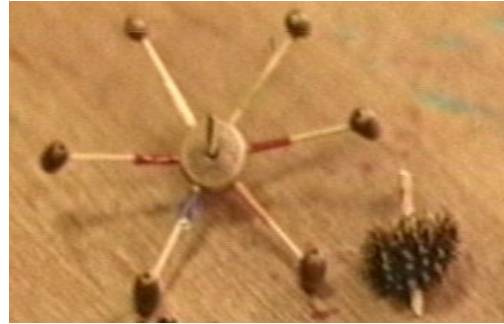
使えば、幼児教室の時だけでなく家でも、「これをおもちゃにしてみよう」と子どもが考えて、お父さんやお母さんにいろいろなものを用意してもらえます。

上の写真の2人は、どちらも幼稚園の4歳児です。左の子は家を作りました。これをごらんになる大人の多くは、「屋根はどうするの?」といいます。この子にとって家は、屋根があるよりも前に、そこでゆっくりできるところです。これは、この子の自分の家です。屋根は後からつけます。右の子も4歳児です。切り出しナイフを使って、苦労して3カ所に穴を開け、自分自身がロボットになっています。幼稚園の年中組の子でもこれだけのことができるのです。そばにいる大人は教えませんから、「なんとかして、やりとげたい。助けてもらわないで自分でロボットになるんだ」という気になった子です。

次は年長組の5歳児です。私たちの船のイメージとは全然違っています。子どもにとって船とは水に浮かぶもので



大きな船（5歳児）



どんぐりの独楽

す。たくさんの旗を立てています。心理学的には、旗の1本1本が自分自身です。自己主張のあらわれです。

身近なもの、たとえば牛乳パック、空き缶、アイスクリームの容器など、どの家庭にもあるようなものを使っているいろいろなものを作りました。秋になると木の実を探しに山の中を歩き、いろいろな色の木の実を集めてペンダントを作ったり、^{こま}独楽を作ったりしました。子どもたちは、上のような独楽にも挑戦します。ゆっくり長くまわってくれます。そのほか鉄砲とか弓とか、自分の力を振るえるおもちゃは、男の子にも女の子にも大人気です。牛乳キャップ、洗濯バサミ、台所のごみ袋（こいのぼりの材料に最適）など、いろいろなものがおもちゃに出来上がります。

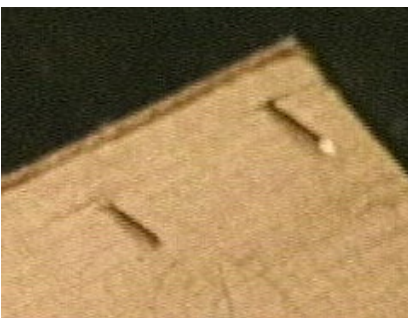
次の写真は、大人の作った見本の「パチンコ」で、ビー玉を転がし、ところどころに受け皿と障害物を作っておきます。これがすごく人気のある活動です。なにしろ本格的な仕事です。大人用ののこぎりを使って、金槌で振るって

釘をこんなにたくさん打って、そして竹で受け皿も取り付ける。これを作っている時の5歳児の子の様子をちょっと見てください。

この子は5歳児です。板を自分で切り、外枠を打ちつけています。外枠をつけないとビー玉が外へと飛び出すので、これは大事な仕事だとすぐわかるのです。私はこの時もすぐそばにいましたが、指示は一切しません。「困った。どうしよう？」と聞かれても、「さあ、どうしよう」、「どうしたらいいかなあ」というぐらいしか相手にしない。仕方がない、自分で考えるしかない、という子に育てられていました。

外枠を調子よく打っていました。金槌でコンコンと打つのですが、とつぜん顔をしかめました。

写真のようになっていたのです。どこか手に当たって痛かったか、服にひっかかったために顔をしかめたのでしょ





う。彼は、板をひっくり返しました。つまり、先ほどのデューイの5局面で言いますと、「アイタタタ」あるいは「服に引っかかった」という問題が生じた。「これどうなってるんだ」というので、

裏返しにした。「ああ、こんなになってしまっている。さあどうしよう」……どうしたと思われませんか？ まずは、だれでも思いつくように、金槌でコンコンと叩いて戻そうとしました。残念ながら、うまくいかない。板は乾いていて、しっかり打ちつけてある上に、釘が寝ていますからね。寝ている釘を叩いて戻すのは、なかなか厄介です。だいぶ頑張りましたが、彼はあきらめて、第2の仮説に行きました。押しでもだめなら引いてみようというわけでしょうか、ペンチを持ってきました。こういう時でも私は、「なかなかいい考えだね」などとは言いません。

「お、今度はペンチ？」というくらいです。彼は、これでいけると思っています。しかし残念ながらうまくいかなかった。あまりにもしっかり打ち込んであったので、釘の頭をつまむことができない。さあどうしましょう。

皆さんはどう思われますか。叩いてもダメ、引っ張ってもダメ。でも、この子は、そのままにしおくと何が困るか、というところまで戻ったのです。つまり、金槌で叩い



て戻してみた。ペンチで引っこ抜こうとしてみた。どっちもダメだった。そこでデューイの創造的な思考の第2の「問題を見つめる」まで戻りました。

つまり釘が出ていたら何が問題なのかと彼は考えた。釘が出ていても当たっても痛くなければいい。服に引っかからなければいい。彼のアイデア、見てください。

これは5歳の子ですよ。釘が出てるといふことの問題の本質を見抜いたんです。しかも、その後、指先で撫でて、思わずニコと笑いました。つまり、自分で「これでいける」と確かめたのです。

次の週です。1週目ではうまく仕上がらなかったのが、ビー玉が入る受け皿を作ろうとしています。まず輪切りにして、次にして半分にすればいい。彼は、竹はのこぎりで切らなくても、金槌でナ



イフを打ち込んで、ぎゅっとひねれば見事に気持ちよく割れることを経験して知っています。ところが、横にして割ろうとしています。何か言いたくなるのを我慢しました。



彼は、うまくいかないで、その竹を立てて、まずは2つに分けてしまおうとしました。さて、どうなったでしょう。

うまくいきました。隣の子に「ほら、見てみい。できたぞー」と自慢しています。ところが、またしても問題が発生します。手元を見てください。私は止めません。彼は、横でも割れると思ってやってみたのですが、予想外のことが起きてしまった。

補足しますと、5歳の子で、金槌のこんなところを持つ子は、相当に金槌を使い慣れている子です。本職の大工さんはもっと端の方を持ちます。初めて金槌を使う子は金属部のすぐ近くを持ちます。この次に、彼がいかにか、小さな科学者のように考える力をつけつつあるかが、よくわかります。

この子は、まだ失敗したとは思っていません。「縦に小さく割れてしまったけれど、これではどうかなあ」と、ビ

一玉がうまく入ってくれるかどうかを、自分で確かめているのです。これでは小さすぎて、ビー玉がちゃんと入ってくれそうにありません。改めて竹を輪切りにして、2つに割って仕上げました。こういう時、大人の多くは声かけてしまいます。



「ちょっと待って。縦と横の違いぐらい考えなさいよ」などと、余計なことを言ってしまいます。それでは、せっかく子どもが小さな科学者として成長している姿の邪魔をすることになります。

デューイの「創造的思考の5局面」に戻ってみると……

1. 問題の感知…「困った、どうしよう。何とかせんと」
2. 問題の観察…「一体どうなってるんだ」
3. 仮説の暗示…「そうだ、こうしたらいいに違いない」
4. 結論の推敲…「本当にこれでいいかなあ」
5. 行動による検証……実行して「うまくいった」

または、「ああ、ダメだ」

この子は、第2の仮説としてペンチでやってみた。ダメだった。そこで第3の仮説に行く前に「問題の観察」にまで戻りました。まさに、科学者が物事を考えるときと同じように考えて作っています。

ニールとサマーヒル・スクール

さて、もう一人、学校をつくるにあたってとても大きなヒントをもらったのがイギリスのニールです。これがサマーヒル



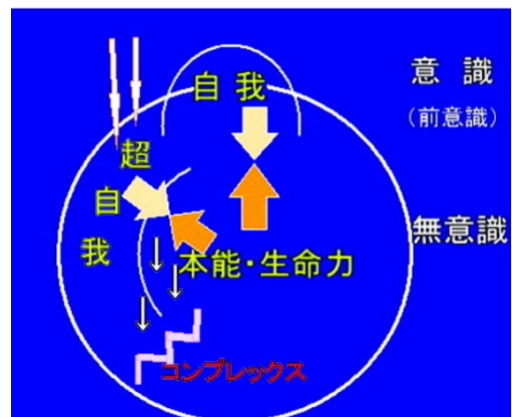
(Summerhill School) という学校です。昔の広い邸宅のようなところを使っています。彼の本を読んで、最も重く私の心の中に入り込んできたのが、困った子ども、つまり物を壊したり、ウソをついたり、盗みをはたらいたりする子どもというのは、悪い子ではない。かわいそうな子だよ、という発想の大転換でした。

「困った子というのは実は不幸な子である。彼は内心でたたかっている。その結果として外界に向かってたたかう。」

(『問題の子ども』)

問題の子どもは、心の中に葛藤あるいは戦争が起きている、というのです。

これは、ご存知フロイトの図式です。人間の心は大きく意識と無意識に分かれ



る。それまでの心理学は意識の部分だけしか扱ってこなかった。しかし実は無意識の方がうんと大きくて力が強くて、我々に対して支配力を振るっている。その無意識の中には、だれでもが持って生まれた「生きようとする力や願い（本能・生命力）」と、生まれた後に外から入ってきて、いつのまにか無意識化されてしまっている無意識（超自我）がある。この両者の間に戦争状態が起きている。これが解決されないと、どんどん沈み込んでいく。しかし、なくなったわけではない。何かにつけて、これが力を振るうというわけです。

無意識化されたこととは、例えば、我々はほとんどが右手でペンや箸を持ちます。イギリス人は、かなり多くの人が左手でも字を書きます。でも、日本の文化の中ではお茶碗を持つ手、箸を持つ手、としつけられています。生まれつき左利きの人の割合は、私の調べたところ、いちばん少ない説でも12%で、3分の1は生まれつき左利きではないかという研究者まであるくらいです。私たちが赤信号で止まるのだって、いちいち頭で考えて進もうか止まろうか、などと考えないではないですか。自然に足が止まります。それが「超自我」です。しかし、それが本能・生命力と衝突しなければいいけれど、しばしば戦争状態が起きています。しかも、なんといっても無意識ですから、我々にはそれがなぜなのか、どういうことが起きているのかわからな

い。ここのところは、子どもの相手をする時にとっても大事だと思えます。大人は子どもに対してよく言います。「何べん言ったらわかるの」とか、「いつまでそんなことしてるの」、「いいか悪いか考えてごらん」といった言い方をします。しかし、「何回も注意されているのに、どうしていつまでも同じことをするの」と言われて、ある男の子は言いました。

「ぼくに言わんといて。ぼくの心に言って」（2年生男子）

これは教育学上の名言だと思えます。この問題を解決しないことには心が平和にならない。ニールは、盗み癖が直らない子といっしょに隣の家へニワトリ泥棒に入るとか、盗みを働いた子にご褒美をあげるとかいったことをしています。これは「超自我」をつくり直すのが目的です。つまり教え込まれた道徳から子どもを解放して、子ども自身が「ものの見方や考え方」を再構成するのを援助しようというわけです。

「すべての因習と迷信と偽善から解放された時、その時はじめて、私たちは教育を受けたといえるのだ。」（『教師の手記』1915年、32歳）

彼が最初に書いた本の中のことばです。教え込まれた道徳や知識ではなく、自分自身でいろいろやってみて、考え抜いて自分自身の生き方を身につけていく。それを応援するのが学校だということです。

ある時、女の子がボソボソと言っていたことばを耳にして、私は胸がつまりました。

「わたしね、ここにいて、わたしでいられるの。」

「ここ」というのは、子どもの村です。それまでは自分ではない自分を強制されて生きてこなくてはいけなかったのでしょうか。小学校5年の女の子です。

子どもたちの心の中を生き生きと、澁刺と、そして自己否定感のないような状態にしよう。それさえはっきりしていたら、あとの学習や人間関係や道徳など、すべてその^{あと}後に続く。ニイルはそういうふうにも書いています。

そこでニイルは、サマーヒルでは、自分自身の生き方ができる子どもになってもらいたい。そのための練習の場が学校だというので、非常に特徴のある3つのやり方を取り入れました。

まず授業に出るか出ないかは子どもが決める。本当に授業に出ていない子もほんの少しはありますが、一方で「もう授業時間が始まっている。早く来てよ」と言って、子どもが先生を呼びに来る授業もとても多くあります。

次に、ミーティングをしてみんなで話し合っで決める。時には、大人が反対しても子どもたちとの多数決で決まってしまうことさえあります。でも、その結果がよくなければ、次のミーティングで「やっぱりうまくいかないよ」と大人が議題を出せばよろしい。

最後に、「〇〇先生」と呼ばれる大人は一人もいない。みんなファーストネームで呼ばれています。ニイルはアレキサンダーという長い名前なので、短く「ニイル」と呼ばれていましたけれど、ジャックとかメアリーとかいうふうには、どの大人もファーストネームで呼ばれています。Mr. も Mrs. も何もつけません。

これが初めてニイルと会った時（1971）の写真です。緊張しました。7月の終わりなのに背広を着こんで、ネクタイまで締めてます。2度めはその翌年で、3度めは残念ながら彼の葬儀の日でした。



キルクハニテェイ

ジョン・デューイとニイルのほかにもう一人、私にとってとても大事な人がありました。ジョン・エッケンヘッドといいます。ニイルの考え方にすっかり共鳴した人ですが、ニイルとはちがって、自分はスコットランドで学校をつくるぞ、と行って学校づくりを始めました。

ニイルもスコットランドの出身なのですが、最初は「スコットランドでそんな自由な学校は無理だ。やめたほうが



キルクハニティの本館



宿舎（元家畜小屋）

いい」と忠告しました。それでもジョンが「やっぱりやる」と言い出したのが、ちょうど第2次世界大戦が始まったばかりの頃（1940年）でした。みんなが、せめて戦争が終わるまで待て、とアドバイスしましたが、ニイルはその時になって「今こそやらないといけない」と励ましたそうです。

本館は重要文化財にも指定されています。1940年に5人



の子どもと共に開校して、1997年まで続けました。牛や馬や豚がいた家畜小屋が、宿舎、教室、陶芸の部屋などの改装されて使われていました。

これこそは最もキルクハニティらしい建物です。^{ひいらぎ} 柎の木の上につリーハットができた。しかし、子どもたちは満足せずに、「2階

建てにしようぜ」、さらに「もう1階いけるぞ」となりました。材料は、ジョン校長が製材所からタダでもらってきたものばかりです。ハラハラドキドキしながら、でっかいものに挑戦するという意味で、心理的な解放につながります。さらに思い切り頭を使わないとこんなことはできません。「これでうまく



いきそう、いやダメか、いやいやもうちょっと」と考え続けます。それだけではありません。夢と目標をひとつにして、みんなで仕上げていく共同の大事業です。このほかにも本格的なモノづくりや建物の新築にも挑戦しています。

食事は、普通の家庭のようにお父さん役とお母さん役の職員と、子どもたち何人かが集まって、一つのテーブルを囲んで食べるというやり方でした。

さまざまな理論と実践に学ぶ

私たちは、基本的な考え方はデューイとニールから学びましたが、実践面ではキルクハニティからもとても多くを

学びました。私たちの学校のやり方を考えていくにあたって、いちばん大事な人は、デューイ、ニール、エッケンヘッドの3人です。デューイ (Dewey)、ニール (Neill)、エッケンヘッド (Aitkenhead) で、ちょうどうまく「DNA」になっています (笑)。だから、私たちの最も大事な遺伝子はこの3人です。

でも、それだけではありません。さまざまな理論や実践を抜け目なく取り入れています。

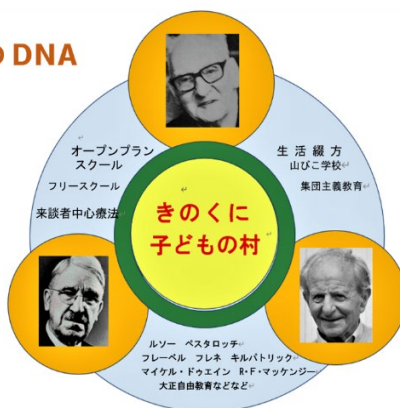
戦前の日本で輝かしい歴史を持っている生活綴方とか、戦後の「山びこ学校」とか、あるいは30年代に注目された集団主義教育などです。(目標の共有や役割分担のための話し合いをするのには、この考え方がヒントになっています。)

イギリスのオープンプラン・スクールとかリースクールとか、カール・ロジャーズの来談者中心のカウンセリングのやり方とか、そのほか、ルソー、ペスタロッチ、フレーベルなど、多くの有名な教育家の実践と思想が入り込んできて、子どもの村の基本理念ができています。でも特別に大事なのはこの3人 (デューイ、ニール、エッケンヘッド) です。

学習の質を、先生の

子どもの村の DNA

Dewey
Neill
Aitkenhead



話を聞いていたら済むという従来の授業ではなくて、子どもたち自身が発見する、つくっていく、確かめるという学習の仕方に変えていこうというのが、私たちの大きな願いでもあるわけです。

子どもの村学園の実際

私たちは、どんな子どもになってほしいと願っているでしょうか。その教育目標をひとことでいえば「自由な子ども」への成長の援助ということになります。

自由な子どもというのは、感情面でも、知的にも、社会的にも自由な子どもという意味です。

1. まず、感情面では、情緒が安定している、自信を持っている、生きる喜びをいつも感じている、という心の中の状態の子ども。
2. そして、ジョン・デューイが言ったような、知的好奇心が旺盛で、「小さな科学者」のように考える子ども。
3. こういうことは、子ども一人だけではできません。何らかの大きさのグループが必要になります。みんなで思いを共通にして、そのための役割分担をして、結果を喜び合う。そういう意味で社会的にも自由な子ども。

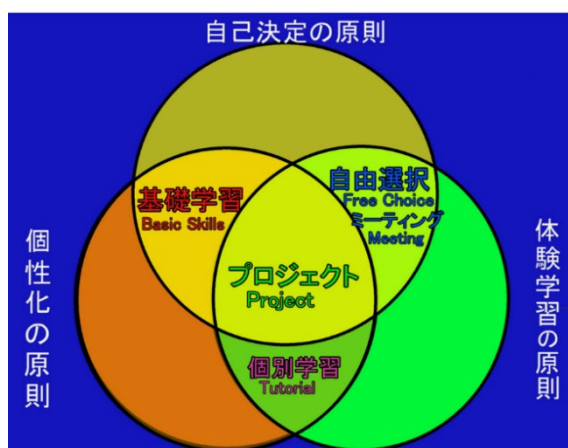
こういう子どもたちになってもらおうというのです。でも、現在の普通の学校のやり方ではとても無理のようです。

なぜなら、先生が何でも決めてしまいます。子どもが決めることがほとんどありません。これでは、私たちが思うような意味での自由な子どもはとうてい育たない。だから、まず第1に、できるだけ子どもが決める、子どもが選ぶ、というようにしよう。⇒自己決定の原則。

現代の学校では、年齢が同じというだけの理由で40人もの子どもに同じことを、同じ教材で、同じスピードで、同じ目標に向かって教え込んでいます。子どもたちは年齢が同じでも一人ひとりが違っているのだから、学習の仕方、ペース、そして教材を多様化しないとイケない。⇒個性化の原則。

子どもたち自身が発見するようにしたい。そのためには教科書中心のやり方ではとても無理なようです。ジョン・デューイが奨励したような、生きる上でどうしても必要な、そして子どもたちが好奇心に駆られて熱心に取り組むような活動に挑戦して、そこからいろいろな方面に興味や関心を広げていく学校にしよう。⇒体験学習の原則。

そして、この自己決定、個性化、体験学習という3つの原則をずらしてできた図形から、普段の学習活動を組み立てました。



3つの原則のすべてが重なっている真ん中をプロジェクトと名付けました。小学校では、これが学習時間のおよそ半分を占めています。

それと分かちがたく外側にくっついているのが**基礎学習**。小学校では「ことば」と「かず」。中学校では、いわゆる教科学習的な学びです。一人ひとりが違うのを大事にしようという個性化の原則の外側の部分は、体育とか音楽とか、ミーティングとかの、いわゆる**グループ活動**です。

個別学習は、自分の思うことだけに取り組むのではなく、教師の方から「こんなこともできるんじゃない？」とか「これもいっぺん調べてみたら？」とかいったアドバイスや挑発を受けながら、個々の子ども（特に中学生）がやってみる時間です。

この4つで時間割を作りました。こういうわけで小学校では、国語、算数、理科、社会といった教科名はありません。その代わりに「自由選択（多種多様な活動から学期単位で選ぶ）」や「全校集会」といった変わった名前が週間計画に登場します。

プロジェクト

真ん中のプロジェクトは、体験学習ですが、その活動の中で、頭も心も手先も人間関係も、まとめて発達してもらいま

しょうという考え方に立っています。ですから、手先を使うための体験学習ではないし、実物に触れるからというだけの体験学習でもありません。いちばん大事なのは、デューイが言ったような、自分で考える態度と能力です。そのためには、ままごとや理科実験のような形ではなくて、生きていく上で必要なホンモノの活動でないといけません。

そこで普段の衣食住や「生きるための活動」からまず始めます。でも、それには「読み書き算」とか「九九」とか、あるいは三角関数といったものが大事な「**道具**」として使われます。例えば九九は、覚えて言えるようになったとしても、それだけでは九九をマスターしたとはいえません。九九は使えるようにならないと意味はないでしょう。九九は言えたらよろしい、ということになりがちですが、それを道具として使うということの方がずっと大事です。

しかも、そうして子どもが見つけたものを、自分でつくり上げた知的生産物だと見てあげようと考えます。先ほどのパチンコを作っていた子のガムテープなどは、まさにその好例です。彼はそこから得た知識をその後もいろんなところで応用しています。

では、プロジェクトの時間にどうしているのでしょうか。次の写真では、長いすべり台を作っています。斜面に作るのですが、きれいな曲線になるように作るのはどうも難しそうだ。何回かに分けて作るしかない。では何回に分け



ようか、という話し合いです。この時は3回か4回に分けることになりました。

次は、きのくに（和歌山）の大人と子どもの全員が集まった全校集会です。普段の友だち間のトラブルから国際問題まで、何でも議題になります。大地震に見舞われた人たちのために、自分らのおやつ代を半分にして寄付を送ろう、といった提案が可決されることもあります。多数決では大人の1票も1年生の1票も同じ1票です。



次は、かつやま子どもの村の全校集会です。小学1年生の子もいれば、中学3年生の子もいます。大人も参加します。どの学校にもミーティング委員会があつて、この時の議長も委員の一人で小学校5年生です。

どのクラスでも、プロジェクトで何をどのようにするかについても、しょっちゅう話し合いになります。このクラスミーティングでは、担任の大人も手を挙げていますが、ほかの子らは挙



げていないので、大人の提案はたぶん否決されたのでしょう。子どもの村は、とにかく話し合いの多い学校です。走っているバスの中でも話し合いになることもあります。



ファームという名前のクラスの子どもたちが作った野菜の自慢をしています。立派な白菜と大根ができました。「ピーマン1万個大作戦」というのにも挑戦しました。

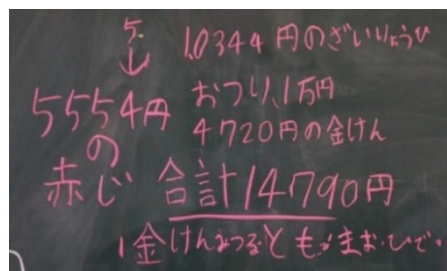


工務店クラスのおもちゃ博物館づくりです。何を建てるかという長いミーティングが続いて、ようやく棟上げむねあです。担任（右下）は、何も指示しないでビデオを撮っています。完成したら自分たちの自慢の手作りおもちゃを展示します。

南アルプスの子が、春まつりで、うどんを作っています。お客さんにどんどん食べてもらって、うんともうけてクラス旅行をしようという計画です。



麺を茹でる長さの実験を繰り返して、材料の値段の比較などをして、しっかりと計画を立てました。「まつり」が終わって、



材料費と売り上げの計算をしてみると、ざんねん、かなりの赤字になってしまいました。

和歌山（きのくに）での様子です。学校は、谷の低いところにあります。寮は山の上にあります。かなり回り道をしないですむように近道をつくろうというので始まった活動です。

斜面がとても急なので、滑り落ちるといけない、杭を打ってロープを通して落ちないようにすることになりました。この写真の2人は2年生と3年生です。ニコニコ笑ってますけど、「おいおい大丈夫？」と言いたくなりませんか？



3 か月かかって近道は完成しました。大仕事でした。私たちはこの時に抜け目なく、いろいろな学習へと話を持っていきます。杭を打ってロープを通すことにして、その杭はどれぐらいの間隔で打つか。平均して1メートルか80センチか、それとも……。近道全体の長さを測って杭が何本必要かも計算しないとはいけません。Aというホームセンターでは1本が百何十円、Bというホームセンターでは10本の束でいくら。どっちがお得か。その頃は消費税が始まったばかりで3%でしたが、払うお金はどれだけ？ ……まさに盛沢山の算数なのです。全体のロープの長さにしても、杭に普通に通すだけか、通して一回ぐるっと回ってから次へ行くかで、どれぐらい違うか計算しなくてははいけません。

それだけではありません。道という漢字を使ったことばや言い回しや、ことわざ・格言など……担任はどんどん欲張ります。……。

たとえば歴史的にどんな道があるだろう。東海道五十三次



とか中仙道とかシルクロードとか、そんな話まで広がっていきます。理科の話にもなりました。例えば、出来上がった段階で、子どもたちがどこかに隠れて、何人の子が通ってくれるかと数えていたのですが、数人が滑ってしりもちをついた。なにしろ出来上がったのは12月でしたからね。

「8人も滑ったぞ」というので、大人の出番です。

「なぜ滑ったんだろう。」

「それはね、凍ってたから滑ったんだ。」

「でも、なぜ凍ってたの？」

「それは冬だから凍ったんだ。」

「冬だったら、なぜ凍るの？」

このあと地球は地軸が23.5度傾いて自転しているから、太陽のまわりのこっちの時と反対側の時では、何がどう違うか、というようにして天文学の話まで進んでしまいました。

右の2人は入ってきたばかりの1年生です。女の子はサツマイモ料理のために秤を使っています。男の子は、テラスを作って遊び場を広げるために電動ドリルを使っています。

プロジェクトを学習計画の中心に据えると、そこから普段の毎日の生活のいろいろなことが決まってきます。



まず、1週間の授業時間数のうちの半分はプロジェクトという形で進めます。学級編成は完全に縦割り学級になります。子どもたちは、どんな活動をしたいかによってクラスを選ぶからです。料理をしたい子、農業をしたい子、工作や木工をしたい子というように分かれてクラスができます。だから、クラスの名前は、何年何組とかではなく、工務店、ファーム、劇団、料理店、クラフトセンターなどになるわけです。子どもたちは、大人から紹介された各クラスの主な活動の候補と、担任（2人）と、参加しそうな友だちの顔ぶれなどを見て自分の参加するクラスを選びます。

こういうやり方で大事なのは、プロジェクトとして道を作ったりする活動と、いわゆる基礎学習的なこととの間に、相互に依存関係があるように計画を立てることです。

子ども自身が考えて選んだり決めたりする学校です。次の1週間の計画も子どもたちと一緒に決めて決めます。「自由選択」では、体育とか音楽とか、時には手話とか、いろいろな活動を子どもが1学期単位で選べるようにします。

さらに学校の外へどんどん出ていきます。女性職員でもマイクロバスの運転のできる人が何人もいます。

学校の建物の設計にしても、今まで通りのまっすぐな廊下があって、同じ大きさの教室が連続してつながっている校舎

ではとても無理です。できるだけオープンプラン方式にした方が使いやすいです。

外部の先生、村の先生、町の先生にもどンドン入ってきてもらいます。福井の勝山の村では、昔は炭焼きがとても大事な産業だったというので、木炭はどうやって焼くか、やってみようということになりました。けれど炭焼きの窯のことなど、大人の中にだれ一人として知る者はありません。村のお年寄りに来てもらって、窯の作り方を教えてもらいました。

中学生たちが、地元で昔から伝わる踊りを村のおばさんに教わっています。運動会の日には保護者に披露しました。

1996年、キルクハニティのあの3階建てのツリーハットに対して、スコットランド文部省から「直ちに取り壊せ」という命令が来てしまいました。その後、私たちの学園が施設全体を買い取った時に、第1に考えたのがこのツリーハットの再建です。小学生たちががんばりました。





古いテレビを解体しています。真ん中の機械部分を全部取りのぞいて枠だけ残すのですが、何のためでしょう。この子らは劇団というクラスの子なのですが、自分たちがテレビに出て自作自演のお話づくりを楽しみます。

「臨時ニュースを申し上げます。堀さんが宝くじを買いました。30万円当たりました。奥さんにみんなとられました」といったニュースを作って喜んでいます。

ファームのクラスの子たちが、ある年、ジャガイモを植えたのですが、残念ながら植えつけが遅すぎて小さいイモしかできなかった。でも、ジャガイモの劇をしたいと言い出しました。

年末に学校へ見学に来た人たちに「何を育てているの？」と聞かれて「ジャガイモー！」と応えたけれど、豆粒のよう



なイモしか見せられなかった。見学の人たちからさんざんバカにされてしまった。

「まあ、仕方ないか。子

どもの仕事なんだから」

「これじゃあ豆ジャガじゃが」

「そうじゃがそうじゃが」

子どもたちはアカンペーして怒りました。

次の年に、また同じ人たちが「去年のあのジャガイモはひどかったねえ」と言いながらやってきました。今年は小さいイモからだんだん大きくなって、最後の巨大ジャガイモを見せられて見学者たちが仰天して幕になるというお話です。日本児童青年演劇協会の集まりに私が呼ばれて行った時に見てもらったら、すごく褒めてもらいました。

中学生たちが区長さんに連れられて、「昔はここに家があった」、「ここは田んぼだった」、「ここは用水の溜め池になったんだよ」などと村の中を案内してもらっています。正式の担任がいない世にもめずらしいクラスの中学生たちです。区長さんに教えてもらいながら、なぜこの村がこんなに人が少なくなって、子どもも減って寂^{さび}れてきたんだろうと3年間こだわり続けて、1冊の本にまとめ、普通の書店に出る



中学生が出版した本

ホンモノの本として出版しました。この子らは、この村がだんだんと寂しくなっていくということと、昭和30年代の日本の経済発展の時代とがちょうど連動している、ということに気がつきました。

それを聞いた福井のかつやまの中学生が、今度は過疎化が進んだ村ではなくて、もうなくなってしまった村について、またしつこく調べて、別の本を出版しました。

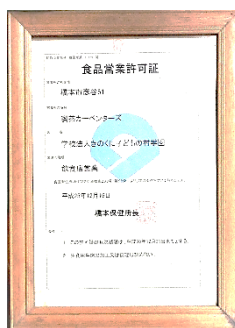
山梨の正式の担任のいないクラスの子らも、県内に流行した地方病についてこだわり続けて本にしました。日本公衆衛生学会という学会での発表に招かれました。

工務店というクラスは喫茶店を建てて営業しています。右側が喫茶店の店員たちで、左がお客さんたち。カレーライス



と飲み物を出すのですが、保健所の所長から正式の営業個許可書ももらったホンモノの喫茶店です。どんな料理でも出せます。あるテレビで、

「日本でいちばん営業時間の



短い喫茶店」と報道されてしまいました。

基礎学習

基礎学習のことも少し紹介しておきましょう。基礎学習のことを私たちは「ことば」と「かず」と呼んでいます。その中身の中心は国語と算数に近いのですが、理科や社会につながる内容も多く、またそれぞれのクラスのプロジェクトとも連動するように工夫しています。学習プリント類はすべて手作りです。市販のものは一切使いません。



このプリントには自分たちの顔や写真まで出てきます。上の子は「かず」のプリントに取り組みながら思わず笑っています。（「子どもの村のおもしろ学習プリント」という本の出版が企画されています。ご期待ください。）

子どもたちは一人ずつ別の机ではなく、テーブルに一緒に腰かけて、時には「ああでもない」、「こうでもない」と言いながらプリントに挑戦します。

小学1年生の算数では「10のかたまり」というのに、どの学校の先生も力を入れられるのですが、この概念がち

やんと頭に入っていないと、
繰り上がり繰り下がり
の学習に苦勞します。私
たちの学校では、まず
手を使い、感覚で確か
めながら、1年生の4月
の終わりには1000の位
まで目で見て理解して
もらいます。写真のよ
うに10個ずつ集めて、
それが10個あつまたら
100、100が10個で1000……
でも10にならない残
りが7つなので、これ
を、どう書いたらいい
か。子どもの方でも
すぐに気付いてくれ
ます。

「かんたんやー。1187
でいいんじゃない？」

とまあ、こんなふう
にして位取りの学習
が進みます。「手と
目をつかう算数の」
の初歩です。

上の2人はどちら
も1年生です。「か
ず」の時間にババ
抜きをしています。
普通のババ抜きの
ように、同じ数の
札が来たら下にお
ろせるのではなく
て、もらった札と
持っている札の中
で、合わせて10に
なるのが見つかり
たらおろす、とい
う子どもの村で開
発されたババ抜き
です。





1年生の3学期には九九の表を自分で作っています。金属のレールにビー玉を転がしてつくります。100までの目盛りが打ってあって「8が3個で24、次の8個を転がしたら32になるはず。えーと、その次は……」などと言いながら自分たちで九九の表を作っています。この学校では九九の表は、先生から配ってもらえません。

次は、買い物に行った時の様子です。1人200円までは何でも買っていいことにしたのですが、「お前いくら残ってる?」「オレは15円残ってる」「ぼくは20円」「全部あわせたらもう1個買えるぞ」とか、そんな計算をしているところです。

機嫌よく買い物していたのですが、とつぜんみんなで言い出しました。

「堀さん堀さん、ラーメン食べたくなった」。

「ええっ? ラーメン?」と思いましたがパッとひらめきました。



「小さいラーメンだったら1人1個ずつ買っていいよ」。

「わーい、わーい、わー

い」と言った途端、

「だけどすぐには食べない。賞味期限が切れたら食べよう。」

さあ、あと何日で賞味期限が切れるかを計算しないといけません。まさに実践的な算数です。1か月が30日とは限りませんからね。

プリントはすべて手作りで、しかも実際にいる子どもや大人まで写真付きで登場します。例えば…、九々の学習に続けて…………

「ひでちゃんは、もっと美人になりたいので、『美人になるくすり』をのんでいます。あさとよるに1つぶずつのみます。1しゅうかんでは、なんつぶのみますか。」

「ゴンちゃんももっと金持ちになりたいので、『金持ちになるくすり』をのんでいます。朝、ひる、ばん、そして寝る前にも1つぶずつのみます。1しゅうかんでは、なんつぶのみますか。」

(ゴンちゃんというのは小学校の校長先生です。)

子どもたちは、こういうプリントに喜んで挑戦してくれます。このプリントの最後にはこんな質問です。

「ところで、ゴンちゃんは金持ちになりましたか。」

「すごい金持ちになった」「少し金持ちになった」

「変わらなかった」

「少し貧乏になった」「すごく貧乏になった」。

この5つから選ぶようにしてあります、たいがいの子が「少し金持ちになった」を選びますね。

これは漢字のプリントです。「漢字のひみつ」シリーズとして、おもしろいフレーズをたくさん作って配ります。子どもたちは喜んでくれます。

「大きな太った犬に吠えられた」

「森や林には木がいっぱい」

「タヒチ島で死んだ」などなど。

子どもたちは、堀さんのプリントには何か「しかけ」があるぞと言いながら、それを探り出そうとします。

「駅の駐車場に馬がいた」

こういう時はまた歴史の話に持っていくことができます。

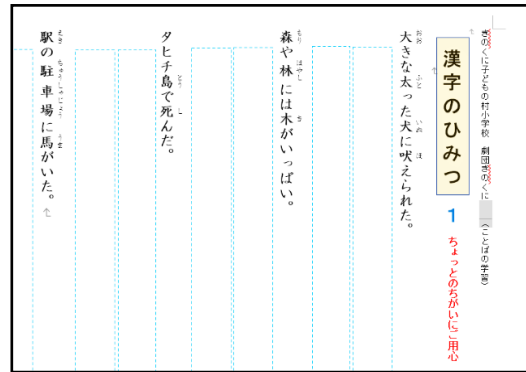
「駅って何？」

「新幹線や電車が止まるところで、レールがいっぱいある。」

「だけど新幹線も電車もなんにもない頃でも、蒸気機関車もなかった時代にも駅っていうのはあったんだよ。」

「ええーっ！ そんなあ。」

こういうところから、駅ということばの意味から、馬車



や船でものを運んだ時代とかいうように、抜け目なく歴史の話にまで持って行きます。

「ことば」のプリントでは、こんなものもあります。

「八方美人」

1. どの方向から見てもきれいな人
2. だれにでもいい顔をするイヤな人

どっちが正しいか選びなさい、という問題にすると、ほとんどの子が「1」に○を付けます。こういう問題を考えながらプリントを作るのはとても楽しいのです。

学力は大丈夫か

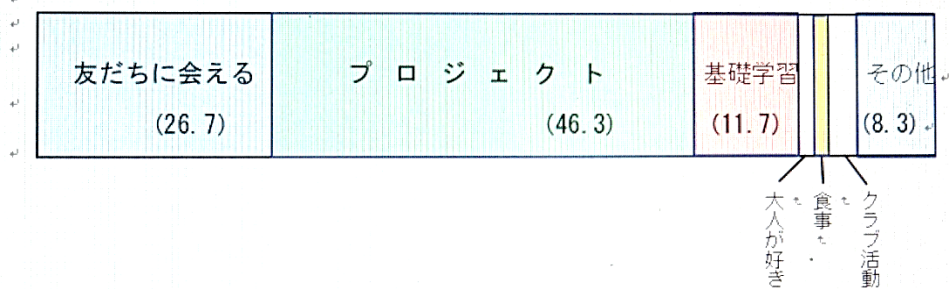
最初の方の生活実態調査の結果に話をもどしましょう。

「学校でいちばん楽しいのは何か」

という問いに対して「授業」と答えた小学生は、農村で5%、大都市ではゼロに近い2%しかありませんでした。私たちは、せめて3割、できれば3分の1ぐらいは、授業や学習がいちばん、と言ってくれるような学校をつくりたい。そう思って活動を始めたのですが、さて、実際はどうなったのでしょうか。

学校ができてから25年が過ぎた頃、子どもの村の小学校高学年の子に同じように「学校でいちばん楽しいことは何か」という質問をしてみました。「プロジェクト」と「基

学校でいちばん楽しいこと
 (2016年、きのくに子どもの村小学校4~6年、数字は%)



「基礎学習」がいわゆる授業に当たるわけですが、なんと、合わせて58%の子が、授業がいちばん楽しいと言ってくれました。

しかし、この結果を見てもまだ疑いの晴れない人たちもいます。

「学校は楽しいだけでいいのかですか。」

「高校への入試で困るんじゃないか」などなど。

そこで別の方法で確かめました。私たちの中学校の卒業生が高校へ入ると、期末試験や中間テストなどで同じ問題を使った学年共通試験があります。その学年全体での順位を調べました。結果はこの表の通りです。

子どもの村中学校卒業生の高校進学後の成績

(期末試験等における学年全体での平均順位)

年度 平均順位	2009年	2010年	2011年	2012年
平均順位 学年生徒数	$\frac{38}{238}$	$\frac{17}{214}$	$\frac{33}{287}$	$\frac{17}{194}$

1年目(2009年)を例にとると、卒業生たちの進んだ高校の1学年全体の平均が238人で、我が校の卒業生の順位の平均は38位となっています。あとの3年間はほぼ同じ割合の結果が続きます。卒業生たちは、高校へ行っても学力面ではとくに困っていない、とあってよいでしょう。

以上で、私たちの学園の考え方と実際の様子はおおよそおわかりいただけたでしょうか。

最後に2, 3付け加えさせてください。

私たちの学校への入学の手続きですが、いわゆる入学試験というようなものではありません。ご本人にも一度は見学に来てもらって、そのあと2泊3日(6年生だけ3泊4日)の体験入学に来ていただき、本人の希望と保護者のご理解を確認したのち、ベッドなどの余裕があれば入ってもらえます。なお、中学校からの入学は原則としてお受けしていません。高等専修学校では、外部生の入学試験にも実施しています。

職員の基本給は、職種や年齢に関係なく全員が同額です。つまり高卒の人も学園長の私も、20歳の人も60歳を超えた人も基本給はまったく同じです。ただし扶養家族のある人にはかなり多めに手当をつけています。

最後にもう一つ。私たちの学校についてこんな勘違いをしておられる方がいらっしゃるようなのです。

「子どもの村は自由な学校だから、授業に出ても出なくても自由。登校してもしなくても好きなようにしてよろしい。」

子どもの村はプロジェクト中心の学校です。子どもたちが、みんなで思いを持ち寄って、話し合いを重ねて、共に汗を流して、その結果を喜び合うという学校です。好き勝手ができるのではなくて、とても忙しい学校なのです。そして、その忙しさを楽しむ学校でもあります。

開校1年目のことです。ふつうの公立校に合わせて低学年の授業時間数を減らして、火曜と木曜は午前中だけにしたところ、子どもたちから抗議されました。

「ぼくらだけ、ひるから（午後）がないからソンしてる。大きい子だけなんて、ずるい！」

子どもたちから「学校の休みが長すぎる」といって文句を言われることの多い学校です。

まだまだお話したいことは山ほどあるのですが、今日のところはこのへんで終わりにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。